24

テノールは元相撲少年

コヒ



(158) 夢破れても歌い続ける

イタリアの大衆歌曲「フニクリ・フニク ラ」は恋と登山電車を歌う。19世紀末に生 まれ、世界三大テノールもコンサートのこ こぞという場面で披露してきた。親しみや すいメロディーは国境を越えて愛される。 日本ではこんな歌詞で広まった。

べおにのパンツはいいパンツ つよいぞ つよいぞ

庄司慧士さん(23)はこの春、富山市民 プラザで開かれた無料コンサートの1曲目 に選んだ。トラ柄のマントをひるがえし、 テノールの歌声で愉快な歌詞を響かせる。 会場の空気を一気につかんだ。

歌い終えて、自己紹介をする場面ではこ う切り出した。「大相撲春場所の千秋楽は ご覧になりましたか。若隆景が12勝3敗 で並んだ高安との優勝決定戦を制しまし た」。「おにのパンツ」の次は相撲の話。 意外な展開の連続に、聴衆は引き込まれた。

庄司さんはかつて相撲に励んだ。167なの 身長に対して、ピーク時の体重は101 繋だ で落とした。土俵に立っていた面影はない が、今でも相撲は大好きだ。

明るいステージに込めた思いを尋ねると 「みんなが知らないマニアックな曲は、あ んまりやりたくないんですよ。楽しいのが 一番です」と話す。

今でこそ小柄だが、小学生の時は大きな 方だった。身長はクラスで3番目くらい。 さらに運動好きでわんぱく。担任の教諭が 相撲のクラブ活動に誘ってくれた。生まれ 育った富山市呉羽地区は横綱・太刀山の出 身地で伝統的に相撲が盛んだった。

相手を倒すか、土俵から出すか。ルールは 単純。一瞬で勝負が決着するスピード感が、 目立ちたがり屋を自認する庄司さんの心を つかんだ。中学校まで相撲を続け、両国国 技館で開かれた全国大会にも出場した。

相撲部を引退した中学3年生の秋。庄司 さんのクラスは合唱コンクールでゴスペラ ーズの「言葉にすれば」を歌った。庄司さん はソロパートに名乗りを上げた。これまで 合唱では他の男子と同様、周りに紛れるよ うに歌っていた。しかし、学級代表として芽 生えた責任感が背中を押した。

冒頭のハミングの後、庄司さんは4小節 を1人で歌った。しんと静まり返った体育 館に声が響いた。スポットライトを浴びた 気分だった。歌う快感を知った。

友人にも、教師にも褒められた。もっと 歌いたくなった。それまで普通科を志望し ていたが、県内の音楽家を多数輩出する呉 羽高校の音楽コースに切り替えた。

息子の方向転換に両親は猛反対した。相 撲少年が声楽に突然目覚めたことに困惑し ていた。教員の父には「俺がいきなり料理人 になるようなもんだ」と言われた。母は担 任に翻意させるよう頼んだ。3日間も家族 会議が開かれたが、庄司さんは押し切った。

無事に呉羽高校に合格した。声楽を指導 した黒崎隆憲さん(65)は、庄司さんの体 格が印象的だった。「コロコロしていて元気 がいい。相撲をやっていたから体幹がしっ かりしている。息の支え方を教えても覚え がよかった。素直で叙情的な声はテノール 向きだと思った」と振り返る。

テノールは高い音域の男声。当初は高音

た。そうした努力の積み重ねで成績は常に 上位をキープ。学内での賞も受けた。

いずれオペラ歌手になる。教員免許を一 応取ったが、就職は考えなかった。華やか なステージで拍手を浴びる瞬間を思い描い ていた。卒業後の進路は新国立劇場のオペ ラ研修所に定めた。世界で活躍する歌手が 巣立っている機関だった。

研修生を選ぶ1次試験を突破した。2次 試験は新国立劇場のオペラパレスで開かれ た。2千人近くを収容するホールは威厳た っぷりだ。これまで歌ったことがある会場 はもっと小さい。ステージに立った瞬間に 嫌な予感がした。空間に見合う声の響かせ 方が分からない。焦ると、余計にうまく歌 えない。結果はメールで知らされたが、開 封前に不合格だと分かっていた。

大学卒業後は富山に戻ることにした。東 京に残っても、コロナのせいで練習する場 気持ちで応募し、昨年9月から市内の特別 支援学校で働くことになった。

次の道が見つかるまでの「つなぎ」のつ もりだった。しかし、障害がある子どもた ちと打ち解け、信頼される過程に喜びを感 じた。最初は距離があっても、慣れると手を つなぎたがってくれた。コロナ禍で歌えな い時に「フニクリ・フニクラ」の練習場面を 動画で見せたら笑ってくれた。任期が切れ て、お別れの挨拶をして涙を流せば、子ども が背中をさすってくれた。結局、そのまま 継続して同じ学校で働くことになったのは 少しばつが悪かったが、うれしかった。

今は小学5年生の副担任で、教科によっ ては主担当として教壇に立つ。「まだ子ど もたちと上手に会話のキャッチボールはで きません。ベテランの先生方の言葉の一つ 一つに感心するばかりです」。たじろぎな がらも、正規の教員を目指すと決めた。

通勤の車中など、時間を見つけては歌声 を磨き続けている。レッスンを付ける富山 市出身の声楽家、小林大祐さん(37)は 「庄司君は真面目で熱意がある。ちゃんと 練習しているのが分かる。音大を卒業した 後も、地方でレッスンを受け続けるのは強 い意志がないとできない」と褒める。

スマホをのぞけば、同級生が商業的なミ ュージカルの舞台に立ったり、大きなコン クールで優勝したりしている。「歯車が噛 み合えば、あそこにいるのは自分だったの かも」とも思う。でも、富山にも歌う場は ある。地元の音楽家が出演するコンサート やオペラにお呼びがかかる。どこであろう と、歌えば楽しい。マスクをしていても真 剣に耳を傾けてくれているのは分かる。

今の目標は、教師の仕事をしながら、日 本音楽コンクールで1位を取ること。プロ の声楽家も挑む権威ある大会だ。二足のわ らじでのチャレンジはたやすくない。「大 変なことは分かっています。でも頑張る姿 を子どもたちに見せることに意味がある気 がするんです」。コンクールの参加資格は35 歳まで。土俵際まで挑戦するつもりだ。

101 慰もあった庄司さんはランニングでス リムになったそうです。先日は黒部名水マ ラソンのフルマラソン(42.195*。)に出場し ました。初めてのフルマラソンながら、一 人前の市民ランナーの証しとされる「サブ 4」(4時間切り)を達成しました。歌唱 以外にも相撲で培った精神力や体力が生か されているようです。



を出すのに苦労したが、失恋をきっかけに 音域が広がった。恋に破れ、練習に集中で きたのかもしれない。県青少年音楽コンク ールでは大賞に輝いた。「やっぱり歌で生き る」と音大の最高峰、東京芸大に進んだ。 今度は反対されなかった。

東京芸大はクセの強い学生が集まる。特 に庄司さんのようなテノールは、オペラの 主役級を担当することが多く、自己顕示欲 をにじませる。発声練習で誰かが大きく歌 えば、それよりも大きな声を出す。高い声が 聞こえれば、上を行こうとする。直接言葉 に表さなくても、みんなギラギラしていた。

ライバルたちに負けまいと土日も練習室 にこもった。コンサートにも意識的に通っ た。吸収できるものは、全て吸収したかっ 所もない。オペラ研修所の合格に賭けてい たから、何をすべきかも分からなかった。音 楽で生きる不安から解放された安堵感と、 東京への未練が複雑に入り混じった。「ど ん底だけれど、ホッともしていました」

半年ほど、実家の自室にこもった。「ニ ート状態でした」と自嘲する。傷心であろ う息子を気遣ってか、親は怒ることもなか った。昼間も寝たり、スマホをいじったり する日々であっても、歌の練習だけはやめ られなかった。

「臨任講師やったら?」。先行きが見え ない将来について相談すると、高校の先輩 に勧められた。確かに教員免許はあるし、 教育実習には楽しい思い出もあった。軽い

TI

「虹」第7巻 発売中

最新刊の第7巻「虹 補助輪を はずした日の風」は、北日本新聞 連載の121~140回目までの20話分 を収めています。1,100円。問い 合わせは北日本新聞社出版部、電 話076(445)3352 (平日午前9時~ 午後5時)。

心があたたまるエピソ**ー**ドや、 この紙面についての ご意見、ご感想を お寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50 北日本新聞社西部本社「虹」係 FAX 0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は7月1日(金)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに OTANI 大谷製鉄株式会社

企画•制作/北日本新聞社 メディアビジネス局